

新たな治水への転換点

開成町長 露木 順一

あけましておめでとうございます！

常に挑戦する気持ちとスピード感を持って町政に取り組みます。どうぞよろしくお願い致します。新年早々、災害の話で申し訳ありません。今年の9月8日、台風9号による豪雨。一時雨当たり開成町で最大72ミリ。上流の山北町は、147ミリ。時間当たり50ミリの雨にどのように対処するかが治水の基本です。今思いますと大口の土手がよく切れなかったと思うほどです。富士山の大爆発後の治水工事、1726年、田中丘隅によって大口土手の復旧がなりました。その努力が現在も私たちを守ってくれたことになりました。

河川敷の水辺スポーツ公園、濁流に洗われてしまいました。急ピッチで復旧工事を行い11月14日には、パークゴルフの全国大会を開催することができました。いち早く再開にこぎ着けることができたのは、被害の翌日ボランティアの皆さんが流木や土砂を取り除いてくださったからです。文命中学校の生徒の活躍、本当に素晴らしいです。

酒匂川には、霞堤（かすみでい）といって堤防に切れ目があって二重堤防になっているところが三か所あります。一か所は開成町の水辺スポーツ公園のすぐ下流地点、小田原市栢山の城北工業高校の上流地点、それと小田原市中曾根の小田原アリーナ付近です。霞堤は、大水が出た時、土手の切れ目から水が逆流し、一時期、遊水地のようになります。昨年の大水の時、三か所とも逆流した水で一杯になりました。小田原市内では堤防ぎりぎりまで水位が上がったところがありますので霞堤がもし無かったとしたら土手を水が越えてしまったかもしれません。

霞堤は、甲斐の国（山梨県）の戦国武将、武田信玄が生み出した治水技術です。洪水の際、ある程度、水があふれることを前提に、できる限り被害を少なくしようという発想です。その後、科学技術の発展によりダムを造り土手を堅固にすれば防ぎ切れるという考え方が主流になりました。しかし、想定外のゲリラ豪雨は、そうした考えが万全でないことを明らかにしました。

開成町の霞堤は、九十間土手（くじっけんどて）と言われます。1938年大水で決壊しました。九十間土手は、改修工事が行われ1941年に完成しました。今年、ちょうど70年。開成町民と下流の小田原市民の有志の皆さんが九十間土手の復旧70周年をきっかけに霞堤の持つ意味を考え直す催しを企画されています。極めて意義深い取り組みです。

地球全体の気象がおかしくなっています。こうした時代の治水は、ダムや堤防に頼り切るのではなく、万が一の時に、いかに被害を減らすかという減災の発想に立ち、行政も住民もこれまでの方法を考え直すことが大切だと思います。開成町は、23年度、防災計画の見直しを行います。治水のあり方も再検討します。町民の皆さまも大いに関心を深めてください。



第16回 パークゴルフ全国大会(昨年11月14日)



被害の翌日の昨年9月9日、大勢の中学生もごみを拾ってくれました。

